The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銀雀山漢墓竹簡「雄牝城」篇と中国古代の攻城・守城の思想
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 213-228
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　二一三―二二八頁

銀雀山漢墓竹簡「雄牝城」篇と中国古代の攻城・守城の思想

椛島雅弘

序言

銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』（文物出版社、二〇一〇年）所収の「論政論兵之類」には、「【雄牝城】」篇という篇が含まれている。「雄牝城」という篇名は、元々の篇題ではなく、整理小組が内容から仮に名付けたものである。雄牝城篇は、攻めにくい「雄城」と攻めやすい「牝城」をそれぞれ箇条書き風に規定している。小論では、雄牝城篇に見える攻城論と、攻城論と深い関わりを有する守城論を分析することによって、中国兵学思想史の意義を明らかにしたい。

一、雄牝城篇の概要

まずは、雄牝城篇の内容について分析したい。なお、雄牝城篇を引用する際には、『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』を底本として、考察を進めて行く。

まず、「雄城」と「牝城」を表にまとめると（表一）の通りである。

多くの項目が「雄城なり」「牝城なり」と、明確に規定されているのに対し、雄城の二、牝城の一、三、四は、「城」という語が見えず、単に「攻むべからず」「撃つべし」と書かれているだけである。このように、中には直接攻城戦と結びつかない項目もあるが、一応（表一）から除外せずに掲げている。

雄牝城篇は、その城が攻撃できるか否かを、城内及び周辺の地形によって規定している。具体的には、「負丘（二段になった丘）」「亢山（高い山）」「名谷（深い谷）」「**渾**沢（小さな沢）」「発沢（大きな沢）」が、攻城の難易を決める重要な要素である。

（表一）

	雄城	牝城
一	城在**渾**澤之中、無亢山名谷、而有付（負）丘于其四方者、雄城也、不可攻也。	營軍趣舍、毋回名水、傷氣弱志、可𣪘（撃）也。
二	軍食溜（流）水、【□□□、不可攻】也。	城背名谷、無亢山其左右、虚城也、可𣪘（撃）也。
三	城前名谷、倍（背）亢山、雄城也、不可攻也。	【□】盡燒者、死襄（壤）也、可𣪘（撃）也。
四	城中高外下者、雄城也、不可攻也。	軍食氾水者、死水也、可𣪘（撃）也。
五	城中有付丘者、雄城也、不可攻也。	城在發澤中、無名谷付丘者、牝城也、可𣪘（撃）也。
六		城在亢山間、無名谷付丘者、牝城也、可𣪘（撃）也。
七		城前亢山、倍（背）名谷、前高後下者、牝城也、可𣪘（撃）也。

『孫子』軍争篇には、「高陵勿向、背邱勿逆。（高陵には向かう勿かれ、背邱には逆うる勿かれ。）」とあり、また行軍篇には「視生處高、戰隆無登。（生を視ては高きに処り、隆きに戦いては登る無かれ。）」とある。敵と対峙した際、高地から攻撃するほうが有利であるから、低地からの攻撃を戒める記述である（注1）。この理論は、雄牝城篇にある「城の中高く外下き者は、雄城なり」（雄城の四）にも適用される。城が高い位置にあり、その周囲が低地であることによって、守城側は、より高所から投射を行うことができる一方、低地から攻める攻城側は、城壁を抜くのに相当の困難を伴う。

また雄牝城篇では、「城中に負丘有る者は、雄城なり」（雄城の五）とあるように、「負丘」が城内の中央に存在する場合、攻めづらくなることを指摘する。この場合、仮に攻城側が城門を突破したとしても、守城側の総司令官を捕らえるか、中央政庁を抑えなければ勝利とならない。城内に丘があれば、恐らく総司令官は丘の上に陣を構え、また中央政庁も丘の上にあるため、攻城側は、高地の敵に対して戦いを挑まなければならない。よって、「雄城」に規定されることが推測される。

このように、雄牝城篇の攻城論は、『孫子』の野戦における理論と所々で共通している。ただし、雄牝城篇で

は、『孫子』で述べられる地形の活用法が適用されない場合も存在する。城の周りに山や丘が存在していると、より高地から攻撃を仕掛けることができ、一見攻城側にとって有利に感じる。実際、「城、亢山の間に在り、名谷付丘無き者は、牝城なり」（牝城の六）では、城の左右に高山がある場合、その高山に陣を取り、高所から投射することができるが故に、「牝城」に分類されることが予想される。つまり、この場合の山は、攻城側にとって有利に働くのである(注2)。

ただし、「城、名谷を前にし、亢山を背にするは、雄城なり」（雄城の三）のように、他の条件との兼ね合いで、山が攻城側にとって有利に働かない場合もある。城の前に深い谷があれば、それは天然の堀として、守城側にとって有利に機能する。よって、背後の高山に回り込んで、城を攻撃することは難しくなる。この場合、攻城側は山の利点を充分に活かすことができない。

それでは、「名谷」はどうだろうか。前述の通り、もし城の前方に谷があれば、攻城側は攻めづらくなる。一方、「城、名谷を背にし、其の左右に亢山無きは、虚城なり」（牝城の二）とあるように、城の後方にあれば、守城側は援軍を求めることが困難となり、また落城した際、自国の領地に逃げることは難しいため、攻城側にとって有利に働く。以上のように、城周辺の地形の配置や、それらの兼ね合いによって、どちらにとって有利に作用するか決定するのである。

最後に、「**滓**沢」「発沢」と城との関係について確認したい。「**滓**沢」は、「城、**滓**沢の中に在り、亢山名谷無く、而れども負丘、其の四方に有る者は、雄城なり」（雄城の一）とあるように、「雄城」の条件とされている。これは、『孫子』行軍篇に

欲戰者、無附于水而迎客。視生處高、無迎水流。此處水上之軍也。絶斥澤、惟亟去勿留。若交軍于斥澤之中、必依水草、而背衆樹。此處斥澤之軍也。

戦わんと欲する者は、水に附きて客を迎うること無かれ。生を視ては高きに処り、水流を迎うること無かれ。此れ水上に処るの軍なり。斥沢を絶つには、惟だ亟かに去りて留まること勿れ。若し軍を斥沢の中に交うれば、必ず水草に依りて、衆樹を背にせよ。此れ斥沢に処るの軍なり。

とあるように、水辺は兵の移動が容易ではなく、敵軍への対応が難しいため、迅速に通過するべき地形とされていることと通じる。城周辺が沼沢に囲まれていた場合、

攻城側は、限られた道しか通ることができず、兵を展開させて攻めることができない。

ただし、沼沢が大きすぎると、それを攻城側に利用されてしまう場合がある。雄牝城篇は、「城、発沢の中に在り、名谷付丘無き者は、牝城なり」（牝城の五）とあるように、城周辺に大きな沼沢があることを、攻城側にとって有利であるとする。これは、堤防を築き、雨による増水を待って決壊させることによって、城を攻めることができるので、「牝城」に規定されることが推測される。

以上のように、雄牝城篇における攻城論は、城周辺の地形から総合的に判断し、攻めることが難しい「雄城」と、攻め易い「牝城」をそれぞれ規定するのである。

二、占術兵学と「地」「攻城」

ところで、中国兵学思想において、「地」は、占術的要素と結び付くことがある。例えば、『孫臏兵法』地葆篇は、「五地之勝曰、山勝陵、陵勝阜、阜勝陳丘、陳丘勝林平地。（五地の勝に曰く、山は陵に勝ち、陵は阜に勝ち、阜は陳丘に勝ち、陳丘は林の平地に勝つ。）」とあるように、基本的に「高陵には向かう勿かれ」（『孫子』軍争篇）のような合理的地形論を踏襲する。しかし、一部「五壤之勝、青勝黄、黄勝黒、黒勝赤、赤勝白、白勝青。（五壤の勝は、青は黄に勝ち、黄は黒に勝ち、黒は赤に勝ち、赤は白に勝ち、白は青に勝つ。）」のように、五行説を用いて「地」の優劣に関して述べる。

また、張家山漢墓竹簡『蓋廬』第四章には、「申胥曰、凡戰之道、冬戰從高者擊之、夏戰從卑者擊之、此其勝也。（申胥曰く、凡そ戦の道、冬の戦いは高き者従り之を撃ち、夏の戦いは卑き者従り之を撃つ、此れ其の勝なり。）」とある。これは、福田一也氏が述べる(注4)ように、冬は「陰」の気が盛んになる季節であるため、高い所から低い所へ流れる「水」（陰気）のように攻めることを善しとし、一方、夏は「陽」の気が盛んになる季節であるため、低い所から高い所へ燃え上がる「火」（陽気）のように攻めることを善しとする、と解釈することができる。『蓋廬』では、陰陽説に基づいて「地」と戦争の関係性について述べる。

占術兵学が攻城と結びついた例としては、馬王堆漢墓帛書『日月風雨雲気占』(注5)の記述が挙げられる。「攻城圍邑、疾西風而城拔、東風不拔。（城を攻め邑を囲むに、疾なる西風あらば城抜き、東風あらば抜かず。）」では、風とその方角によって、攻城が成功するか否かを判断する。また別箇所では、

攻城圍邑、智（知）客與主人相勝。以日軍（暈）、雲如雍（鴻）雁相随、出日月軍（暈）中主人勝、入而客勝。

城を攻め邑を囲むに、客と主人と相勝つを知る。日暈を以て、雲の鴻雁のごとく相随い、日月暈中より出でれば主人勝ち、入れば客勝つ。

のように、「暈」（大陽・月の周りに現れる光の輪のこと）の形状・場所により、攻城側と守城側のどちらが勝利するか判断している。

一方、先に確認した通り、雄牝城篇では、地葆篇・『蓋廬』・『日月風雨雲気占』のような占術理論を用いることはせず、あくまで合理的な観点から、「雄城」と「牝城」を分類している。

なお、雄牝城篇の成立時代については、判断材料に乏しいが、時代背景からある程度推測することができる。まず、秦漢時代成立の可能性であるが、統一王朝が誕生し、他国の城を攻める必要の無くなった秦漢時代において、雄牝城篇が作成されたと考えるのは難しい。それでは春秋時代はどうだろうか。春秋時代の戦争は、元々野戦で決着するケースが主流であり、攻城戦も戦国期のごとく頻繁に起こった訳ではなかった。よって、春秋時代に雄牝城篇のような著作が生まれる可能性も薄い。

愛宕元『中国の城郭都市　殷周から明清まで』（中公新書、一九九一年）は、戦国期において城郭構造が変化する原因が、攻城戦の激化であることを指摘した上で、背景に、「戦争の大規模化及び長期化したこと」「主要兵科が戦車から歩兵へ移行したこと」の二つが存在することを述べる。

戦争の大規模化及び長期化が進めば、当然攻撃すべき城も多くなり、攻城戦（及び守城戦）が戦略上重要となる。また、主要兵科が戦車から歩兵に切り替わるということは、平坦な地形でしか機能しない戦車と比べ、歩兵は険阻な地形でも突破して進軍でき、敵国領内深くの侵攻が可能となるということである。そしてその際には、多くの城を攻略する必要性が生じる。

つまり、攻城戦が激化したのは戦国期ということになるが、『史記』を見てみると戦国中期～後期の記事では、侵略戦争が頻繁に発生していることが窺え、また「～（地名）を抜く」という表現が多く見られるようになる。

以上の情報を勘案すれば、雄牝城篇の成立は、戦国期の中期～後期である可能性が最も高いであろう(注3)。

三、『孫子』『孫臏兵法』の攻城論

それでは、雄牝城篇の攻城論は、中国兵学思想史において如何なる意義を有するだろうか。諸兵書における攻城に関する記述に注目して考察したい。

まずは『孫子』について。『孫子』が述べる兵法の根底には、「自国と敵国の資源を保全したまま勝利する」「犠牲を可能な限り減らす」という意図が見られる。これは、戦争に勝利した際の利益をできるだけ確保するためである。

一方、攻城戦は、このような『孫子』の意図と基本的に一致しない。よって謀攻篇では、

故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法、爲不得已。修櫓轒轀、具器械、三月而後成。距闉、又三月而後已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之災也。

故に上兵は謀を伐つ、其の次は交を伐つ、其の次は兵を伐つ、其の下は城を攻む。攻城の法は、已むを得ざるが為なり。櫓・轒轀を修め、器械を具え、三月にして後に成る。距闉又た三月にして後に已わる。将其の忿りに勝えずして、之に蟻附せしめ、士卒の三分の一を殺すも、城の抜けざるは、此れ攻の災なり。

と述べる。攻城に必要な「櫓」「轒轀」といった兵器の用意や、攻城のための陣地（距闉）を築くのに、多大な財力と労力に加え、長い時間を費やし、それが長引けば長引くほど、攻城側は疲弊し、また国の経済も逼迫する。かといって、将軍が短期決着を目論み、無理やり城壁を登って攻撃させれば、味方は甚大な被害を受けたにもかかわらず、城を抜くことができない、という状況になりかねない。よって、攻城戦は「已むを得ず」行うものであり、最も下策である、と規定する。

ただし、謀攻篇の後文では、条件付きで攻城戦を容認する記述が見られる。

故用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。

故に用兵の法は、十なれば則ち之を囲み、五なれば則ち之を攻め、倍すれば則ち之を分かち、敵すれば則ち能く之と戦い、少なければ則ち能く之を逃れ、

若かざれば則ち能く之を避く。故に小敵の堅なるは、大敵の擒なり。

この記述は、攻城戦のみを想定したものか定かではない。しかし、「十なれば則ち之を囲む」については、曹操をはじめとする歴代注釈者が、攻城戦を想定した記述だと解釈する(注6)。また「五なれば則ち之を攻む」も、杜牧や陳暐が攻城と関連させて解説している(注7)。これらの解釈に従うならば、『孫子』は、自軍の兵力が敵軍の五倍から十倍に及んで、はじめて攻城戦を行うことを容認する、ということになる。

また九変篇には、「城有所不攻（城に攻めざる所有り）」と説く。これは、『孫子』四変篇（佚篇）に

城之所不攻者、曰、計吾力足以抜之、抜之而不及利於前、得之而後弗能守。若力【不】足、城必不取、及於前利得而城自降、利不得而不爲害於後。若此者、城唯（雖）可攻、弗攻也。

城の攻めざる所の者は、曰く、吾が力以て之を抜くに足るを計りて、之を抜けども利を前に及ばざる、之を得れども後に守ること能わず。若し力足ら【ざり】て、城必ず取らざる、前に及びて利得て、城自ら降る、利得ざれども害を後に為さざる。此のごとき者は、城攻むるべきと雖も、攻むるべからざるなり。

とあるように、「利害を考えた結果、無理に攻める必要がない」というニュアンスである。例えば、兵力的には充分攻め落とせる差があるが、落としたとしても、その先の進軍に大した利益を与えることがない城、もしくは、手に入れても守りきれる計算が立たない城である。四変篇はこのように、戦略的な見地から「攻むるべからざる」城を規定する。

以上、『孫子』及び『孫子』佚篇とされる四変篇の関連記述を確認した。『孫子』は、双方の被害が甚大となる攻城戦を最も下等な策だと規定するため、攻城戦に関する言及は少ない。また四変篇は、攻城について説くが、「攻むるべからざる」城を説くに留まり、「攻むべき」城について言及することはない。

一方「地」については、計篇で重要視される「五事」の一つに「地」が含まれる。実際、先に確認した軍争篇・行軍篇に加え、九地篇・地形篇でも、「地」について言及する。ただし、雄牝城篇のように、攻城戦と「地」を絡めて具体的記述を行うことはない。

次に『孫臏兵法』を確認したい。

田忌問孫子曰、「患兵者何也、困適（敵）者何也。壁延不得者何也。失天者何也。失地者何也。失人者何也。請問此六者有道乎。」孫子曰、「有。患兵者地也，困適（敵）者險也。故曰、三里瀦（沮）洳將患軍。……涉將留大甲。故曰、患兵者地也、困適（敵）者險也、壁延不得者渠（渠）寒（塞）也。……。（後略）」

田忌、孫子に問いて曰く、「兵を患えしめる者は何ぞや、敵を困める者は何ぞや。壁延の得ざる者は何ぞや。天に失する者は何ぞや。地に失する者は何ぞや。人に失する者は何ぞや。請い問う、此の六者に道有りや。」と。孫子曰く、「有り。兵を患えしめる者は地なり、敵を困める者は険なり。故に曰く、三里の沮洳は将に軍を患えしめんとす。……渉るは将に大甲を留めんとす。故に曰く、兵を患えしめる者は地なり、敵を困める者は険なり、壁延の得ざる者は渠塞なり。……。（後略）」と。（威王問篇）

ここでは、「敵を困める者は何ぞや」と問う田忌に対し、孫臏は、三里も続く「沮洳（泥沼）」のような「険」なる地形と答える。この他『孫臏兵法』では、地形を含めた「地」について、多く言及する。

一方、攻城については、城壁まで進みながらも抜くことができない理由を「渠塞（矢石を防ぐ設備）」に求める。しかし、他に攻城について述べる箇所は、「襲國邑以水則（国邑を襲うには水則を以てす）」（官一篇）しか存在しない。この記述は、城攻めに水を用いるという手法を説き、攻城と地形が関係している。

『孫臏兵法』で多く述べられている戦術論は、以上のような記述を除き、いずれも野戦を想定したものである。これは、『孫子』の「攻城が下策である」という価値観をそのまま受け継いだことにより起きた現象であると推測される。

なお雄牝城篇は、かつて『孫臏兵法』の一部だと見なされていたため、「『孫臏兵法』は攻城戦を重視した」と指摘されていた。しかし現在、雄牝城篇は、「論政論兵之類」の一篇として扱われているため、現時点ではこの認識を改めるべきである(注8)。

四、中国兵書における攻城論

『孫子』・『孫臏兵法』の他、攻城に関する記述は諸兵

書に散見する。『呉子』応変篇では、以下のような記述が存在する。

呉子曰、「凡攻敵圍城之道、城邑既破、各入其宮、御其祿秩、收其器物。軍之所至、無刊其木、發其屋、取其粟、殺其六畜、燔其積聚、示民無殘心。其有請降、許而安之。」

呉子曰く、「凡そ敵を攻め城を囲むの道、城邑既に破るれば、各其の宮に入り、其の祿秩を御し、其の器物を収む。軍の至る所は、其の木を刊り、其の屋を発き、其の粟を取り、其の六畜を殺し、其の積聚を燔くこと無く、民に残心無きを示す。其の降るを請うあらば、許して之を安んず。」と。

城を陥落させた際は、略奪行為を働くことなく、住民に「残心」が無いことを示す、すなわち戦後処理について述べる。

また応変篇には、

武侯問曰、「有師甚衆、既武且勇、背大險阻、右山左水、深溝高壘、守以彊弩、退如山移、進如風雨、糧食又多、難與長守。」

對曰、「大哉問乎。非此車騎之力、聖人之謀也。能備千乘萬騎、兼之徒歩、分爲五軍、各軍一衢。夫五軍五衢、敵人必惑、莫之所加。敵人若堅守、以固其兵、急行間諜、以觀其慮。彼聽吾說、解之而去。不聽吾說、斬使焚書、分爲五戰。戰勝勿追、不勝疾歸。如是佯北、安行疾鬪、一結其前、一絶其後。兩軍銜枚、或左或右、而襲其處、五軍交至、必有其力。此擊彊之道也。」

武侯問いて曰く、「有師りて甚だ衆く、既に武且つ勇にして、大険阻を背にし、山を右にし水を左にし、溝を深くし壘を高くし、守るに強弩を以てし、退くこと山の移るがごとく、進むこと風雨のごとく、糧食又た多くして、与に長く守り難し。」と。

対えて曰く、「大なるかな問や。此れ車騎の力に非ず、聖人の謀なり。能く千乘万騎を備え、之に徒歩を兼ね、分かちて五軍と為し、各一衢に軍す。夫れ五軍五衢ならば、敵人必ず惑いて、之加うる所莫し。敵人若し堅く守り、以て其の兵を固くせば、急に間諜を行りて、以て其の慮を観る。彼、吾が説を聴かば、之を解きて去らん。吾が説を聴かざれば、使を斬り書を焚く、分ちて五戦を為さん。戦い勝つも追うこと勿く、勝たざれば疾く帰る。是のごとく

して佯(いつわ)り北げ、安(しずか)に行き疾く闘い、一は其の前を結び、一は其の後に絶つ。両軍、枚を銜(ふく)み、或いは左し或いは右して、其の処を襲い、五軍交至らば、必ず其の力有らん。此れ強を撃つの道なり。」と。

という問答が存在する。「大険阻を背にし、山を右にし水を左にし、溝を深くし壘を高くす」とあるように、地形と防御拠点を結びつけている点は注目される。

ただし、「之を解きて去らん」とあるように、ここでは攻「城」というよりも、むしろ攻「陣」を想定した記述であるため、雄牝城篇とは少し異なる。また、ここでの主題は、地形と防御拠点の関係性ではなく、「聖人の謀」―つまり、呉起が答える臨機応変の戦術である。

同様の現象は、『六韜』虎韜・略地篇にも見える。

武王曰、「中人絶糧、外不得輸、陰爲約誓、相與密謀。夜出窮寇死戰、其車騎鋭士、或衝我内、或擊我外、士卒迷惑、三軍敗亂。爲之奈何。」

太公曰、「如此者、當分軍爲三軍、謹視地形而處、審知敵人別軍所在及其大城別堡、爲之置遺缺之道以利其心。謹備勿失。敵人恐懼、不入山林、即歸大邑。走其別軍。車騎遠要其前、勿令遺脱。中人、以爲先出者得其徑道、其練卒・材士必出、其老弱獨在。車騎深入長驅、敵人之軍、必莫敢至。慎勿與戰、絶其糧道、圍而守之、必久其日。」

武王曰く、「中人、糧を絶ち、外、輸する得ざるとき、陰に約誓を為し、相与に密に謀る。夜に窮寇を出でて死戦し、其の車騎鋭士、或いは我が内を衝き、或いは我が外を撃たば、士卒迷惑し、三軍敗乱せん。之を為すこと奈何。」と。

太公曰く、「此のごとき者は、当に分ちて軍を三軍と為し、謹みて地形を視て処り、審かに敵人の別軍の在る所及び其の大城別堡を知り、之が為に遺欠の道を置き、以て其の心を利すべし。謹みて備えて失う勿かれ。敵人恐懼し、山林に入らずんば、即ち大邑に帰す。其の別軍に走らん。車騎遠く其の前を要(さえぎ)り、遺脱せしむる勿かれ。中人、以て先づ出でたる者は其の径道を得んと為し、其の練卒・材士は必ず出で、其の老弱のみ独り在らん。車騎深く入り長く駆らば、敵人の軍、必ず敢て至る莫し。慎みて与に戦う勿かれ、其の糧道を絶ち、囲みて之を守り、必ず其の日を久しくせよ。」と。

「謹みて地形を視て処る」とあり、一応攻城戦と地形を

関連付けているが、『呉子』応変篇の記述と同じく、ここでの地形は、あくまで一要素でしかなく、主題とされているわけではない。ここで主題とされているのは、呂尚が語る巧みな計略である。

この他、略地篇では、攻城戦に関する記述が一つ確認される。

武王問太公曰、「戰勝深入、略其地、有大城不可下。其別軍守險、與我相拒。我欲攻城圍邑、恐其別軍卒至而擊我、中外相合、擊我表裏、三軍大亂、上下恐駭。爲之奈何。」太公曰、「凡攻城圍邑、車騎必遠屯衛、警戒阻其外内、中人絶糧、外不得輸、城人恐怖、其將必降。」

武王、太公に問いて曰く、「戦い勝ちて深く入り、其の地を略するに、大城の下すべからざる有り。其の別軍、険を守り、我と相拒ぐ。我、城を攻め邑を囲まんと欲すれども、其の別軍、卒に至りて我を撃ち、中外相合して、我が表裏を撃ち、三軍大いに乱れ、上下恐駭せんことを恐る。之を為すこと奈何。」と。太公曰く、「凡そ城を攻め邑を囲むには、車騎必ず遠く屯衛し、警戒して其の外内を阻て、中人糧を絶ち、外、輸(いた)すを得ざれば、城人恐怖し、其の将必ず降らん。」と。

大きな城を包囲したが、城内外の敵軍が連携して抵抗するので落とせない場合、遠巻きに城を包囲して、城内と場外の連携を絶つと同時に、兵糧攻めにすべきであることを説く。やはりここでも、地形が攻城戦の主題として語られることはない。

また『呉子』・『六韜』には、地形に関する記述は散見する(注9)が、いずれも攻城戦を想定したものではない。

それでは、『尉繚子』はどうだろうか。攻権篇には、攻城に関する記述が二つ見られる。

津梁未發、要塞未修、城險未設、渠答未張、則雖有城無守矣。

津梁未だ発せず、要塞未だ修めず、城険未だ設けず、渠答未だ張らざれば、則ち城有りをと雖も守る無し。

津梁（橋）、要塞、城険、渠答（まきびし等の敵を侵攻を阻害する道具）の備えが充分でない場合は、城を守ることができないと説く。この記述は、視点が守備側のように見えるが、攻権篇に存在する記述なので、恐らく

攻城が容易である条件として提示されていることが予想される。また攻権篇には、「夫城邑空虚而資盡者、我因其虚而攻之。（夫れ城邑空虚にして資尽くる者は、我其の虚なるに因りて之を攻む。）」という記述も存在する。攻撃する城に、人や資材が存在しない場合は攻撃すべきである、と説く。

ここで引用した『尉繚子』の記述は、雄牝城篇と同じく、攻めることができる城の条件を提示するという点で注目される。ただし、地形と関連させて説くことはない。

最後に、成立時代が下るが、『武経総要』を確認したい。

用兵之法、全國爲上、破國次之。全卒爲上、破卒次之。此謂用謀以降敵、必不得已。始修車**櫓**、具器械、三月而後成。踊土距闉、又三月而後已。恐傷人之甚也。故曰攻城爲下。然攻亦有道、必在乎**审**彼之強弱、量我之衆寡、或攻而不圍、或圍而不攻。知此之道、則能勝矣。

用兵の法、国を全うするを上と為し、国を破るは之に次ぐ。卒を全うするを上と為し、卒を破るは之に次ぐ。此れ謀を用いるに以て敵を降すを謂い、必ず已むを得ざるなり。始めて車**櫓**を修め、器械を具え、三月にして後に成る。土を踊（あ）げて距闉又た三月にして後に已わる。恐らくは人を傷つくること之甚しきなり。故に城を攻むるを下と為すと曰う。然れども攻むるにも亦た道有り、必ず彼の強弱を審らかにし、我の衆寡を量り、或いは攻めて囲まず、或いは囲みて攻めざるに在り。此の道を知らば、則ち能く勝つ。（前集巻之十「攻城法」）

冒頭で第二節で引用した『孫子』謀攻篇の言を引用し、攻城が下策であるという認識を改めて行った後、「然れども攻むるにも亦た道有り」として論述を進めていく。その「道」とは「必ず彼の強弱を審らかにし、我の衆寡を量り、或いは攻めて囲まず、或いは囲みて攻めざる」ことである。

その後は、この「道」について、『孫子』を引用しつつ解説する。その際、間諜や攻城兵器については言及するが、地形について言及することはない。なお本文の後には、攻城兵器に関する具体的な図を解説付きで載せている（注10）。

五、『墨子』の守城論と「地」

これまで、雄牝城篇の如く攻城戦と地形を密接に関連付ける記述が存在するかどうか、『孫子』をはじめとする中国兵書を確認した。その結果、様々な側面から攻城戦についてアプローチがされていたが、地形の重要性に触れる記述は少なく、雄牝城篇のように、地形との関係性を主眼に置くことはなかった。

それでは、攻城論と対を成す「守城」論において、地形はどのように位置付けられているのだろうか。視野を広げて検討したい。

中国の守城論を述べる文献といえば、『墨子』である。『墨子』は現在、備城門篇をはじめとする十一の篇において、守城論が確認できる。その中で、地形について言及する箇所は、数ヶ所見られる。例えば備城門篇では、以下のような記述が見られる。

凡守圉之法、城厚以高、池深以廣、高樓斯循、守備繕利、薪食足以支三月以上、人衆以選、吏民和、大臣有功勞於上者多、主信以義、萬民樂之無窮。不然、父母墳墓在、不然、山林草澤之饒足利、不然、地形之難攻而易守也、不然、則有深怨於敵而有大功於上。不然則賞明可信而罰嚴足畏也。此十四者具、則民亦不疑其上矣。然後城可守。十四者無一、則雖善守者不能守矣。

凡そ守圉（ぎょ）の法、城は厚くして以て高く、池は深く以て広く、高楼斯循、守備繕利し、薪食は以て三月以上を支うるに足り、人衆くして以て選び、吏民和し、大臣は上に功労有る者多く、主は信にして以て義、万民は之を楽しむこと窮まり無し。然らずんば、父母墳墓在り。然らずんば、山林草沢の饒は利するに足り、然らずんば、地形の攻め難くして守り易く、然らずんば、則ち敵に深怨有りて上に大功有り、然らずんば則ち賞明らかに信ずべくして罰厳畏るるに足る。此の十四の者具われば、則ち民も亦た其の上を疑わず。然る後に城守るべし。十四の者一つも無くんば、則ち善く守る者と雖も能く守ること能わず。（備城門篇）

計十四にも及ぶ守城のための条件に、「山林草沢の饒は利するに足る」「地形の攻め難くして守り易き」ことが含まれていることに注目したい。また「十四の者一つも無くんば、則ち善く守る者と雖も能く守ること能わ

ず」とあるので、いかにも守城において地形が重要であるように感じる。

しかし、「此の十四の者具われば、則ち民も亦た其の上を疑わず」とあるように、結局重要なのは城主と人民との信頼関係であり、実際、後文では地形に関する言及は見られない。

同様の現象は、号令篇冒頭にも見える。

安國之道、道任地始、地得其任則功成、地不得其任則勞而無功。人亦如此。備不先具者無以安主、吏卒・民多心不一者、皆在其將長。諸行賞罰、及有治者、必出於王公。

国を安んずるの道は、任地道(より)始まり、地其の任を得れば則ち功成り、地、其の任を得ざれば則ち労して功無し。人も亦た此のごとし。備へ先ず具わらざる者は以て主を安んずる無く、吏卒・民の多心にして一ならざる者は、皆其の将長に在り。諸の賞罰を行い、及びて治有る者は、必ず王公に出づ。

「国を安んずるの道」が「任地（地の利に適応すること）」から始まる、と説くが、「人も亦た此のごとし」とあるように、以下では、上下が一致団結することの重要性やそのための方策、場合ごとの軍令等、「人」に関わる内容を述べる。

『墨子』では、この二箇所以外にも、守城を説く際、地形について触れる記述は見られるが、その部分を具体的に解説することはない。逆に、『墨子』の守城戦で多く解説されるのは、「守備兵・城民の統制」や「敵の攻城手段に関する技術的対策」である。「守備兵・城民の統制」については、旗幟篇・号令篇にそれぞれのケースに合わせた方策を説き、「敵の攻城手段に関する技術的対策」については、備城門篇・備高臨篇・備梯篇・備水篇・備突篇・備穴篇・備蛾篇において、それぞれの防御法を解説する。

つまり、『墨子』における地形の重要性は、「守備兵・城民の統制」や「攻城に関する技術的対策」に次ぐ程度のものであったことが予想される。

そしてこの原因は、『墨子』に見える「兼愛」「非攻」の思想に求めることができる。守城戦において、すべての城が都合良く守城側にとって有利な地形であるわけではない。かといって、不利な地形を有利な地形に変えることは難しい。

また、城の内外が不利な「地」だからといって、その城の民を見捨てることは、「兼愛」「非攻」を掲げる墨家

にとって許されることではなかっただろう。よって『墨子』では、地形よりも、人為的に守城の助けとすることが可能である「守備兵・城民の統制」や「敵の攻城手段に関する技術的対策」を重視したことが推測される(注二)。

結語

以上、雄牝城篇の兵学思想史的意義について考察した。中国兵書において、『孫子』地形篇・九地篇をはじめとして、地形について言及する記述は諸書に見られたが、それらは主に野戦を想定したものであった。また『墨子』の守城論にも、一部地形に関する記述は見られたが、雄牝城篇のように具体的に述べることはなかった。

一方で雄牝城篇は、現在見ることができる中国兵書中では唯一、攻城戦を地形と関連付けて具体的に論じていた。雄牝城篇の思想史的意義は、この点に見出すことができよう。

戦国中期以降になると、「論政論兵之類」にある十陣篇・十問篇・将敗篇・五名五恭篇のように、箇条書きにして兵学を分かりやすく整理しようという試みがなされ、恐らくその一環で雄牝城篇が誕生したことが予想される。

このような経緯で成立した雄牝城篇は、極めて具体的な内容であるため、『孫子』が重視する「奇正」「無形」のような臨機応変さ・柔軟さに欠けるという欠点を持つ。また、『孫子』で攻城が下策であると規定されて以来、中国兵学では、その価値観が受け継がれたため、攻城について理論・思想を深めることはできなかったことが推測される。雄牝城篇が、後世伝承されることなく失われてしまった原因は、これらの点に求められるのではないだろうか。

注

(1) また、『孫臏兵法』地葆篇も、「陵を迎うる」ことを「勝たざる」条件の一つに挙げる。

(2) なお、『墨子』備高臨篇には、周囲に高所が無くても、攻城側が自ら土で丘を作り、そこから矢や石を射かける「臨」という戦術に対する防御法を説く。ここからも、いかに攻城戦で高所が重要か読み取ることができる。

(3) 「論政論兵之類」の成立年代については、『竹簡学』(大阪大学出版社、二〇一四年)第三部第二章、及び拙稿「銀雀山漢墓竹簡「聴有五患」篇と古代中国の「聴」」(『待兼山論叢』第四十八号哲学篇、大阪大学文学会、二〇一四年)を参照。

（4）「張家山漢簡『蓋廬』における兵権謀家的思想」（『国際文化研究』第十五号、二〇〇九年）

（5）『日月風雨雲気占』は、元々『刑徳』甲篇・乙篇と同じ帛に書かれていた文献であり、『星占書』・『雲気占』・『軍雑占』等と仮称されてきたが、劉楽賢『馬王堆天文書考釈』（中山大学出版社、二〇〇四年）の『日月風雨雲気占』という命名が最も内容に相応しいと判断したため、劉氏に従った。また、『日月風雨雲気占』の本文引用に際しては、湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心、裘錫圭主編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成　伍』（中華書局、二〇一四年）を底本とした。

（6）例えば曹操は、「曹操曰、以十敵一則圍之、是將智勇等而兵利鈍均也。若主弱客強、不用十也。操所以倍兵圍下邳生擒呂布也。（曹操曰く、十を以て一に敵すれば則ち之を囲むは、是れ将の智勇等しく兵の利鈍均しければなり。主弱く客強きのごとければ、十を用いざるなり。操倍兵もて下邳を囲み呂布を生擒とする所以なり。）」と注している。

（7）例えば杜牧は、「杜牧曰（中略）西魏末、梁州刺史字文仲和據州、不受代。魏將獨孤信率兵討之、仲和嬰城固守、信夜令諸將以衝梯攻其東北、信親帥將士襲其西南、遂克之也。（杜牧曰く（中略）西魏末、梁州刺史字文仲和に州に拠り、代わるを受けず。魏将独孤信兵を率いて之を討ち、仲和嬰城して固く守り、信、夜諸将をして衝梯を以て其の東北を攻めさせしめ、信、親ら将士を帥いて其の西南を襲い、遂に之に克つなり。）」と注している。

（8）『孫臏兵法』と「論政論兵之類」の関係性については、拙稿「『孫臏兵法』再考―「義兵」と「詭道」」（『関西大学中国文学会紀要』第三十六号、関西大学中国文学会、二〇一五年）を参照。

（9）具体的には、『呉子』論將篇・応変篇や『六韜』林戦篇・烏雲山兵篇・烏雲沢兵篇・分険篇等に存在する。

（10）その他、『虎鈐経』や『太白陰経』には、「攻城具」についてまとめた篇がそれぞれ存在するが、『武経総要』のように、より包括的な攻城の「法」について述べることはない。

（11）『墨子』の他、守城に関する記述は、『尉繚子』守権篇、『守法守令等十三篇』守法篇、『太白陰経』守城具篇・築城篇、『武経総要』の「守城」に見えるが、いずれも地形を主題とすることはない。